

D—5 児童の心身発達と乳児期の栄養法との関係とその環境条件について(第8報)

—(3)地域別による乳児期の栄養法と知能との関係—

宮崎大教育 秋山 露子

1. 乳児期の栄養法を生後6カ月以内の栄養法別に母乳栄養法、混合栄養法、人工栄養法の三つに分類し、乳児期の栄養法と知能との関係について年令層別による調査報告を総合的に検討して来た。今回は10才児及び幼稚園児の調査を基として地域別による乳児期の栄養法と知能との関係について検討した。

2. 本研究の資料は1962年10才児947名、1963年10才児444名、1966年幼稚園児213名合計1604名の調査結果によるもので1962年10才児Aは田中・ビネーAB式、1963年10才児Bは田中・ビネーB式、1966年幼稚園児は教研式幼稚園検査甲式によるものでその他の環境条件は質問紙によった。

3. 平均知能偏差値は何れの栄養法も都市は地方に比べて危険率1%~5%の有意差で遙に優れていた。又都市では三栄養法中混合栄養群が最も優れ、人工栄養群が最も劣っていた。地方では平均知能偏差値は10才児Aは混合栄養群が最も優れ、10才児Bは母乳栄養群が最も優れていたが何れも人工栄養群に対して危険率1~5%の有意差が認められた。

しかし幼稚園児の場合は逆に人工栄養群が最も優れ、混合栄養群が最も劣った平均知能偏差値を示したが有意差は認められなかった。知能段階別分布では知能偏差値極上位は都市も地方も母乳栄養群が最も多く、知能偏差値極下位は都市も地方も人工栄養群が最も多いことを示した。